

< REPLY >

堀兼大朗氏・相澤真一氏の

『歴史のなかの大卒労働市場——就職・採用の経済社会学』

への書評に答えて

福井 康貴

(名古屋大学)

このたび思わぬ形で拙著を書評の対象に取り上げていただく機会に恵まれた。拙著は2016年に出版されている。刊行直後は書評を含めて感想やコメントを頂くことも多かったが、3年も経つとそうした機会はめっきり少なくなった。そうした中で相澤氏が記したような経緯で書評研究会を開いていただいたのは筆者にとって大変嬉しい経験であった。書評を寄せていただいた堀兼大朗氏と相澤真一氏に感謝を申し上げる。堀氏と相澤氏から提示された論点を順番に検討する形で進めていきたい。

堀氏からは2つの論点が提示された。まず「埋め込み」という概念が「行為者の相互行為を水路づける背景（規範やルール）を解明する社会学の従来の理論枠組みとどのように異なるのか」という質問があった。「埋め込み」は、カール・ポラニーからインスピレーションを受けて、マーク・グラノヴェッターが提起した概念である。グラノヴェッターは「経済行為と経済的結果は、すべての社会的行為とその結果と同様に、行為者の二者間の関係や、関係のネットワーク全体の構造に影響されるという事実」(1992a)と定義している。この定義では社会ネットワークが強調されているが、その後、認知、文化、政治への「埋め込み」まで拡張したディマジオとズーキンによる定義が現れ(Zukin and DiMaggio 1990)、現在、経済社会学で「埋め込み」という場合はこの拡張された意味で用いられることが多いように思う。

堀氏の質問の裏には「埋め込み」と「社会学の従来の理論枠組み」の間に大きな違いはないのではないかという疑問があると思われる。そしてその疑問はおおむね正しい。「埋め込み」は、基本的に経済学的な説明への批判

[書評に就いて] 『歴史のなかの大卒労働市場——就職・採用の経済社会学』(福井)

として提起された概念であり、経済現象を「社会学の従来のな理論枠組み」で説明することを宣言する意味合いを持っているのである。したがって、社会学者にとって「埋め込み」は目新しいものではない。しかし「埋め込み」という観点を取ることで、経済学とは違う経済現象の説明を提供する可能性が出てくるのだ。この点を理解してもらうために、かなり粗い記述になってしまうが、グラノヴェターの経済学批判を簡単に紹介する(Granovetter 1985)。

新制度派経済学は市場に企業が存在する理由を取引コストで説明する。市場で取引が成立するには個人の限定合理性と機会主義によってコストがかかるが、階層構造を持つ企業の内部で取引を行えば権威の持つ力によってその限界を克服することができる。グラノヴェターはこうした発想に対して、市場では自己利益を最大化する過小社会化された(under-socialized)個人を前提し、組織には規範や価値を内面化する過剰社会化された(over-socialized)個人を前提していると批判を加えている。新制度派経済学は、過小社会化された状態から過剰社会化された状態へと自動的に移行する機能主義的な説明図式に陥っており、現実のダイナミズムを説明する力がないというのがグラノヴェターの批判のポイントである。そして、ダイナミズムを探求する指針が「埋め込み」なのである。

2つ目の論点に移ろう。堀氏は就職協定という制度の変遷を扱った第4章について「規制に盲従しないアクターの存在を描いたことが、他の章に比して大卒労働市場のリアリティを見せているように思える」と指摘したうえで、経済社会学の観点にもとづく詳しい考察を求めている。

筆者としては他の章でも「規制に盲従しないアクターの存在を描いた」つもりはある。たとえば、学校の成績が職業能力を測る指標として適切かどうか疑問を呈する採用者や、「就職戦術書」の助けを借りながら面接官の裏をかこうとする学生と企業の攻防などである。しかし、制度に制約される企業や学生の行為が、制度を書き換えさせるにいたるダイナミズムは、第4章が最も明確に析出しているかもしれない。

第4章では、行為が制度を規定し、制度が行為を規定する関係(「行為と制度の相互規定」と、経済制度が政府や利益集団の利害関係の影響を受け

る「政治的埋め込み」という2つの理論的枠組みによって就職協定の変化を説明した。本書では言及しなかったが、グラノヴェーターは経済社会学のキー概念として「埋め込み」のほかに経済制度の「社会的構築」を挙げている。この概念は経済制度が外的環境によって自動的に特定の形態をとるのではなく、社会的に構築されている(Granovetter 1992b)という考え方であり、バーガー&ルックマンに由来している。第4章の分析は、経済制度の社会的構築を、政治的埋め込みの観点で説明した研究として位置づけることができる。

一般に制度は均衡(equilibrium)として捉えられる傾向があり、河野勝は制度の変化を説明することは社会科学に課された重要な研究課題だと述べている(河野 2002)。社会的構築というアイデアそれ自体に制度の変化を説明する力はないと考えられるので、埋め込みや他の社会科学の理論(たとえば、シュンペーターに由来する起業家概念、集合行動論、イノベーションの普及研究など)と組み合わせつつ、個々の経済制度の変化に独自の説明を編み出していくことが、経済社会学による制度変化の研究の方向性だと言えるのではないだろうか。

相澤氏からは大きく2つの論点が提示されている。第一の論点は「大卒労働市場の見取り図」を得るといふ本書の最終的な目的についてである。相澤氏は、本書によって大卒労働市場の「見取り図」が得られたというより、「大卒労働市場の構成要素についての歴史的事実を読み、知ることができた、という印象にとどまった」と述べたうえで、人物試験、学歴、面接、タイミングといった「構成要素のパターンの変化こそが描かれるべきであったのではなかろうか」と疑問を投げかけている。

最初に筆者の考えていた「見取り図」がいかなるものだったのかを確認したい。終章では「職業能力の推測を核にして、企業と学生の相互行為がその周囲で組織される」といふ本書の大卒労働市場像を提示している。本書において職業能力は(紹介、成績、学校歴、人物といった)複数のシグナルを変数とする関数のアウトプットとして捉えられている。そして相互行為の発生を規制するルールが就職協定である。本書のいう「大卒労働市場の見取り図」はこれらが組み合わさった「モデル」のことを意味している。これだけではいかにも無味乾燥であるが、このモデルは具体的な歴史事象の観察から析出

したものである。アブダクションによるモデル形成や観察事実に理論的な解釈を施すプロセスが、社会学を読み、書く醍醐味であり、経済学にはない特徴だと筆者は考えている。

相澤氏自身は「見取り図」というものを「構成要素のパターンの変化」として捉えているようである。それ以上の説明がないので推測になるが、「構成要素のパターンの変化」を「構成要素の組み合わせ方が時点間でどのように変化したか」ということだと考えてみる。たとえば、ある時期には紹介と成績がシグナルであり、次の時期には成績と人物がシグナルになる、といったプロセスである。

じつは、こうした構成要素の組み合わせ方やその変化を一意に同定することができるという考え方への疑念を拭い去ることが、終章を執筆する時点になっても筆者にはできなかった。関数の形や変数の値は、時代だけにとどまらず、企業の属性（産業、企業規模など）や個人の属性（出身大学、学部など）などによっても変化すると考えられる。そうした数多くの組み合わせ方はパターン化という手段では表現できないように筆者には感じられたのである。終章で用いた「関数」という表現は「構成要素のパターン」を同定してしまうことなく、構成要素の組み合わせの複雑さを簡潔に表現するための苦肉の策であった。

この論点に付随する質問もいくつか頂戴した。第一に「市場が出来上がるという経済事象は、社会学としてどのように説明することができるのか」という質問があった。これは現在の筆者の手に余る非常に大きな質問なので、おおまかな方向性に関してだけ、現時点の考えを述べておきたい。

そもそも「市場が出来上がる」ことの「説明」が意味する内容は、経済学と社会学では異なっていると考えたほうがよい。ニール・スメルサーとリチャード・スウェドバークは主流派経済学と経済社会学を比較した論文を著している（Smelser and Swedberg 2005）。その中に、経済学は合理的行為を仮定するが、社会学は合理的行為にとどまらない様々なタイプの行為を想定して調べるのだといった記述があり、筆者の印象に残っている。経済学者にとって経済主体の合理性は仮定する存在であるが、社会学者にとって当事者の合理性は説明すべき対象なのだと言ってもよい。したがって、社会学者

による市場の研究は、主体の経済的・非経済的な動機に強い仮定をおかないことが出発点になるだろう。その上で、前述した「埋め込み」や社会学理論を参照しながら、動機を形成する要因や意図せざる結果の探求といった方向で、市場の形成に関する説明を組み立てるのではないかと考えられる。

付随する『誕生パラダイム』とどういう距離感を持って叙述を展開しようとしたのか」という点に関してであるが、じつは第1章の元になった論文は「就職の誕生」というタイトルであり、「誕生パラダイム」に則った記述になっている。単発の論文であればそれでも良いのだが、個別の「XXの誕生」を積み重ねて1冊の書籍にするのは難しい。博士論文や書籍の場合、各章に連続性をもたせるストーリーが要求されるためである。本書では、序章で述べたように、(紹介, 成績, 学校歴, 人物といった)職業能力の推測に用いられる指標が、情報の非対称性への対処という観点では機能的に等価だという立場を取ることで、章の間に横串を通すことを試みている。

日本で就職の研究をリードしてきたのは、天野郁夫や竹内洋をはじめとする教育社会学の研究者であり、本書は彼らの研究から多大なインスピレーションを受けている。本書の隠れた課題は、教育社会学の豊かな蓄積を用いながら、教育社会学を踏み越えるような分析を経済社会学の立場から展開してみせることであった。相澤氏は本書が重要な先行研究として竹内を挙げていることに納得とともに違和感を表明している。違和感を覚える理由は竹内の歴史記述が一貫して教育社会学の観点からなされていると相澤氏が考えるからである。

筆者は竹内の研究には教育社会学には収まらない内容が含まれていると考えており、筆者と相澤氏には若干の見解の相違があるようだ。受験・就職・昇進を「選抜」とカテゴライズした『日本のメリトクラシー—構造と心性』は社会階層研究や労働経済学と交差する領域に踏み込んでいるし、彼の人物試験についての分析はアーヴィング・ゴフマンを援用しており、一般的な社会学理論の土台に立つものとして読むことも可能である。

「交換関係の描き方」に関して本書が出発点にしたのは、売り手と買い手の二者関係であり、情報の非対称性が存在する中での両者の相互行為である。この二者関係はそれを制約する社会的な要因に埋め込まれており、そうした

要因は外生的に与えられることもあれば、（第4章の就職協定の分析で示したように）内生的に（あるいは社会的に）構築されることもある。

序章では十分に展開することができなかったが、市場の核心をこのような交換関係として捉えることは、経済学と社会学がともに合意できるポイントではないかと考えている。その上で、当事者の合理性や意味づけの解釈を重視する社会学の伝統（「二重の解釈学」）に立った実証を目指したところに、経済学と区別される本書の独自性がある。スウェドバーグは、経済学と経済社会学が相互に学び合いながら、それぞれのディシプリンを形成していく考えを持っていると感じるが（Swedberg 1990; 2007）、筆者もこの路線に沿い、社会学と経済学の境界に経済社会学を位置づけ、究めていきたいと考えている。

相澤氏が挙げた第二の論点は「近代日本をどう記述するか」という点に関わっている。日本の新卒労働市場の特徴である「間断なき移行」を規定する「ルールの制定の仕方」を明らかにしている点で、第4章は「実証が最も有効に機能している」と評価されている。しかしその他の章に関しては「近代日本というフィールドをうまく生かし切れているように感じなかった点もある。例えば、面接の重視や学歴の重視といった点は、多くの国の大卒労働市場に見られるものである。その点で、大卒労働市場の歴史的形成という海外の経済社会学・歴史社会学の研究からすれば、本書はどこが一步抜け出ようとしたものになったのか」と問われている。

三井や三菱といった財閥系企業の採用については経営史や労働史で一定の蓄積があり、すでに述べたように教育社会学でも重要な研究が存在する。しかし、本書が試みた近現代を対象とした「大卒労働市場の歴史的形成」の研究は、国内はもとより海外をみても先駆的な仕事ではないかと自負している。

もっとも、大学生の就職に関しては、近年、経済社会学の分野で注目すべき研究が現れている。アメリカの経済社会学者であるローレン・リヴェラは、投資銀行などのエリート企業の採用者がエリート大学の卒業生を採用する過程を参与観察やインタビューの手法で研究し、階級に根ざした文化にもとづいて職業能力の評価が行われていることを明らかにしている（Rivera 2015）。彼女の研究と本書は、職業能力が社会的に構築されるという立場（能

力の社会的構成説)を採用している点が共通している。彼女の研究と比べて本書が「一步抜け出ようとした」点としては、能力の社会的構築の前提として企業と学生の間情報の非対称性を明示的に示したことや、約100年間の歴史的展開を上記の「見取り図」に集約する形で描いたことではないかと思われる。

しかしこの「見取り図」には、企業側と学校側の要因が十分に組み込まれているとは言い難く、大卒労働市場の全体ではなくその一部に関するモデルではないかという意見がありうる。企業側が「学校出」への需要を高める過程が十分に描ききれていないという相澤氏のコメントはその点を指摘している。

企業の「学校出」への需要については、経済組織の近代化にとって高等教育が提供する学知が不可欠であったとする天野郁夫の議論や、こうした近代化の完成と採用における「人物」重視の登場を関連づける竹内洋による考察がある。本書では基本的にこうした天野や竹内の知見に依拠して議論を進めている。財閥系企業の内部文書を広範に渉猟することで、相澤氏のいう「うまみ」を生かす分析ができた可能性がある。

この点に関連して「学歴(学校歴)」という表現を用いた意図について述べておきたい。最近では、社会移動研究でも学校歴と職業達成の関係や、高等教育の経済的リターンの異質性に注目した研究が現れているが、これまでの社会移動研究では、いわゆる「タテの学歴」である学校段階と職業達成との関係に照準をあてる傾向があった。筆者はユニバーサル段階を迎えた先進社会において、高等教育を一枚岩と捉えることには限界があると考えており、「ヨコの学歴」である学校歴がもっと注目されるべきだと考えている。そもそも就職・採用活動は戦前期から学校段階ごとに行われており、本書が大卒グループ内に焦点を当てることになったのは自然な流れであった。しかし、「学校歴」という表現は一般読者に馴染みがないと思われたので、「学校歴」を表す表現として「学歴(学校歴)」と記載することにしたのである。

執筆時に「社会移動研究の先行研究との差異化」を意識することはなかったが、現在振り返ってみて考えたことを述べておこう。社会移動研究において、大学の選抜度が大企業就職率に強く影響していることは周知の事実であ

[書評に答えて] 『歴史のなかの大卒労働市場——就職・採用の経済社会学』(福井)

る。しかし、アカデミズムを離れると、この事実とは異なる社会的現実を学生や企業が生きていると感ずることが筆者にはあった。たとえば大卒労働市場では、学校歴が重要だという情報と重要ではないという情報が同時に流通している。また、大学を問わず誰でもエントリーできる自由応募制度は「学校歴と職業能力の関連は強くない」という信念を形成する傾向があると考えられる。

こうしたことをふまえ、第3章では、社会的現実の構成の立場から、学校歴と職業能力の関連に対する当事者の信念(あるいは本書の表現を使えば「見え方」)がどのように構築されているのかを問うことにした。学校推薦や自由応募などの制度と学校歴に関する情報との布置関係が、学校歴と職業能力の関連に対する当事者の社会的現実を構築するというのが第3章で得られた結論である。この点が、学校歴と職業的地位の間の統計的關係を問題にする社会移動研究との差異化のポイントであったのだと今になって思い至った。

「面接を重視する日本の採用姿勢は、近代日本に自生的に内生したものと考えてよいのだろうか」という質問も頂いたが、筆者が調べた限りでは、他の社会の採用慣行を論拠としながら人物試験の正統性を主張するような論考は記憶に残っていない。もちろん筆者が知らないだけで、そうした主張を展開した論者がいた可能性はあるが、そうした論考が大勢を占める事態はなかったように思う。

本書は筆者の博士論文を元にした初の単著である。自分の研究を駆動する問題関心や論点が散りばめられており、思い入れの深い著作である。今回、二人の評者から多くの質問を投げかけられることによって、初めて気づくことができた事柄が数多くあった。このような機会を与えてくれた堀氏と相澤氏に改めて深く感謝したい。

#### [文献]

Granovetter, Mark, 1985, Economic Action and Social Structure: The Problem of Embeddedness, *American Journal of Sociology*, 91(3): 481-510.

—, 1992a, "Problems of Explanation in Economic Sociology," Nohria, N. and



- Eccles, R. G. eds., *Networks and Organizations: Structure, Form and Action*, Boston: Harvard Business School Press: 25-56.
- , 1992b, "Economic Institutions as Social Constructions: A Framework for Analysis," *Acta Sociologica*, 35: 3-11.
- 河野勝, 2002, 『制度』 東京大学出版会.
- Rivera, Lauren, 2015, *Pedigree: How Elite Students Get Elite Jobs*, Princeton: Princeton University Press.
- Smelser, Neil J. and Richard Swedberg, 2005, "Introducing Economic Sociology," Smelser, Neil J. and Richard Swedberg eds., 2005, *The Handbook of Economic Sociology*, second edition, New York and Princeton: Russell Sage Foundation and Princeton University Press: 3-25.
- Swedberg, Richard, 1990, *Economics and Sociology: Redefining Their Boundaries: Conversations with Economists and Sociologists*, Princeton: Princeton University Press.
- , 2007, *Principles of Economic Sociology*, Princeton: Princeton University Press.
- Zukin, Sharon, and DiMaggio, Paul, 1990 "Introduction," Zukin, Sharon and Paul, DiMaggio, eds., *Structures of Capital: The Social Organization of the Economy*, New York: Cambridge University Press: 1-36.

